

はか
博 多 100

— 博多遺跡群第141次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第809集

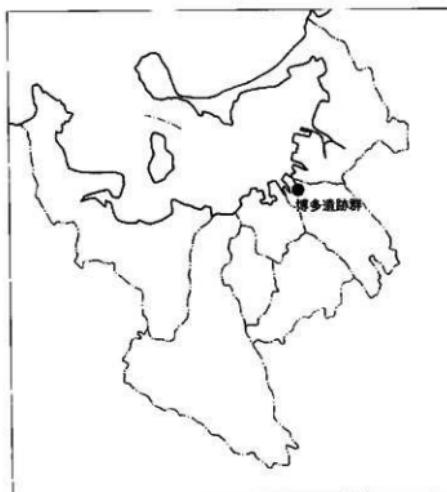
2004年

福岡市教育委員会

はか
博 多 100

— 博多遺跡群第141次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第809集



調査番号 0244
遺跡略号 HKT-141

2004年

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴いやむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に務めています。

本書は共同住宅建設に伴い調査を実施した博多遺跡群第141次発掘調査の報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘にあたり費用負担等のご協力とご理解をいただいたスエヒロ産業株式会社をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区古門戸町 87 番において実施した博多遺跡群第 141 次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は長野嘉一、中村桂子の補助を得て、上角智希が行った。
3. 本書に掲載した遺物の実測は舟橋京子、上角が行った。
4. 本書に掲載した抑図の製図は久家春美、上角が行った。
5. 本書に掲載した写真は上角が撮影した。
6. 本書にかかわる遺物および記録類の整理は久家春美、篠原明美、黒柳恵美、西鷗奈美、奥田節子が行った。
7. 本書の執筆・編集は上角が行った。
8. 本書で用いる方位は磁北である。
9. 遺構の呼称は井戸を SE、溝を SD、土壤を SK、ピットを SP と略号化した。
10. 付論として、出土獸骨について屋山洋氏（福岡市教育委員会）に鑑定・報告していただいた。
11. 博多人形について、山村信榮氏（太宰府市教育委員会）のご教示を得た。
12. 本書にかかわる図面、写真、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13. 遺物の説明、分類については以下の文献を参考にした。
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』
江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

遺跡名	博多遺跡群第 141 次調査	調査番号	0244
所在地	博多区古門戸町 87 番	遺跡略号	HKT-141
開発面積	406 m ²	調査面積	286 m ²
調査期間	平成 14 年 11 月 20 日～平成 15 年 1 月 24 日		

目 次

第一章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査組織	1
3. 遺跡の立地と環境	1
第二章 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
1) 調査経過	4
2) 概要	4
2. 遺構と遺物	7
1) 土壌(SK)	7
2) 井戸(SE)	18
3) その他の出土遺物	19
第三章 まとめ	22
付論 博多遺跡群第141次調査出土動物遺存体について(屋山洋)	24

挿 図 目 次

第 1図 博多遺跡群の位置(1/25,000)	2
第 2図 第141次調査区周辺地形図(1/5,000)	2
第 3図 第141次調査区位置図(1/500)	3
第 4図 第1面遺構配置図(1/100)	5
第 5図 第2面遺構配置図(1/100)	6
第 6図 SK051・015・004・005・007・008・009実測図(1/40)	8
第 7図 SK004出土遺物実測図①(1/3、1/4)	9
第 8図 SK004出土遺物実測図②(1/3、1/4)	10
第 9図 SK005出土遺物実測図①(1/3)	11
第10図 SK005出土遺物実測図②(1/4)	12
第11図 SK007、008出土遺物実測図(1/3、1/4)	13
第12図 SK009出土遺物実測図(1/3、1/4)	14

第13図	SK024・044・047・049・061 実測図(1/40、1/60)	15
第14図	SK044出土遺物実測図(1/3、1/4)	16
第15図	SK024・047・049・061出土遺物実測図(1/3、1/4)	17
第16図	SE041・043・050・063 実測図(1/40)	19
第17図	SE041出土遺物実測図(1/3)	20
第18図	その他の出土遺物実測図①(1/3)	20
第19図	その他の出土遺物実測図②(2/3)	21
第20図	地割復元図(1/150)	23
第21図	息浜中世後半期の地割復元図(1/4,000)	23

表 目 次

第1表 出土銭貨一覧表	22
-------------------	----

図 版 目 次

図版1	1. 第1面南半(東から) 2. 第1面北半(東から) 3. 第2面南半(東から) 4. 第2面北半(東から)	図版3	1. SK009(西から) 2. SK044土層(南西から) 3. SK047(北から) 4. SD011(東から) 5. SD021(北から) 6. SP106(南東から)
図版2	1. 調査区風景(北から) 2. SK051(北から) 3. SK051(北西から) 4. SK004(北東から) 5. SK005(南から) 6. SK007・008(東から)	図版4	出土遺物①
		図版5	出土遺物②
		図版6	出土遺物③

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成14年7月30日付けで、スエヒロ産業株式会社代表取締役松吉繁孝氏より福岡市教育委員会宛てに、博多区古門戸町87番における賃貸マンション建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号：14-2-291）。これを受けた教育委員会埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから、同年8月20日に試掘調査を実施し、中世の遺構の存在を確認した。よって、本調査が必要である旨を回答し、両者で協議した結果、平成14年11月20日より2ヶ月の予定で調査を行うことにした。

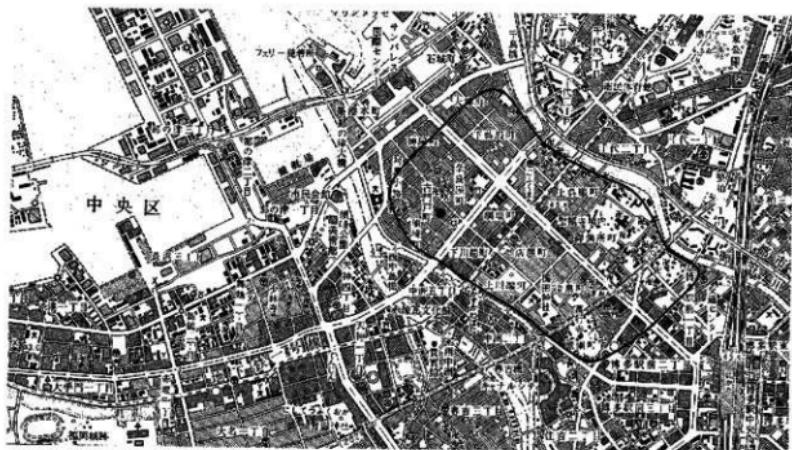
2. 調査組織

調査委託	スエヒロ産業株式会社 代表取締役 松吉繁孝
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 生田征生
調査総括	文化財部長 柳田純孝（前任）、堺 徹（現任）
	埋蔵文化財課長 山崎純男
	調査第2係長 田中壽夫
調査庶務	文化財整備課 御手洗清
試掘担当	山上勇一郎
調査担当	上角智希
調査作業	石橋テル子、一ノ瀬フミヨ、浦伸英、片岡博、加藤寿子、尊田綾代、遠山歟、徳山孝恵、富田歎生、富永美樹、長野嘉一、中村桂子、浜梨里子、前田勉、三浦まり子、宮川ヤエ子
整理作業	久家春美、篠原明美、黒柳恵美、西崎奈美、美田節子

3. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」の時期を中心として、古くは弥生時代から現在までほぼ絶えることなく人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。地理的には、博多湾岸に形成された砂丘上に立地し、西を博多川（那珂川）、東を江戸時代に開削された石堂川（御笠川）、南を石堂川開削以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御等川）によって画される。この砂丘は大きく3列から形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと称される。このうち、内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」と呼ばれ、南西側から北東に延びるラグーンを起源とする狭長な谷部によって区分されている。海側の砂丘Ⅲは「息の浜」と称され、砂丘Ⅱの前面に連れて形成された砂丘で、12世紀前半からの低地の埋め立てによって陸地化が進んでいく。

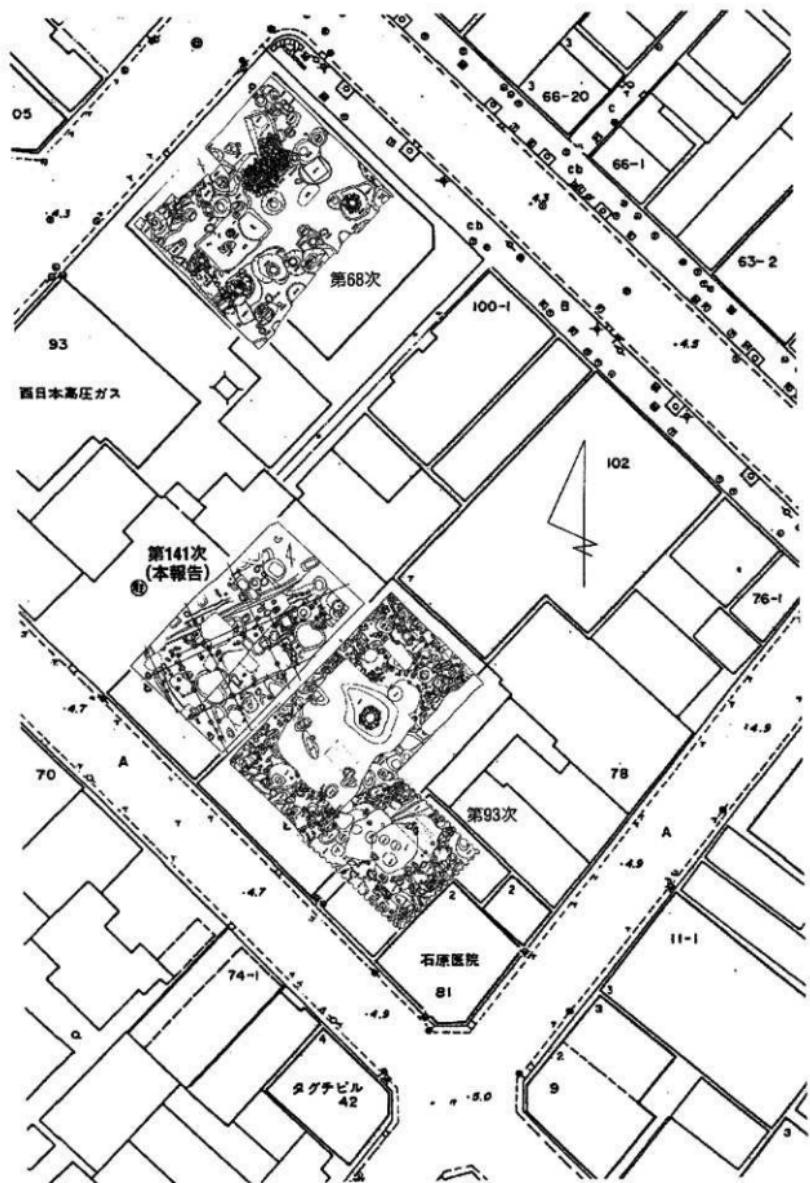
今回報告する第141次調査地点は「息の浜」に位置する。「息の浜」は中世に入ってから歴史の舞台に登場する。鎌倉時代の「蒙古襲来絵詞」がその名の初見であるという。鎌倉時代の2度の元寇で博多の町は戦場となり灰燼に帰した。しかし町はすぐに復興し、13世紀末に鎮西探題が博多に設置され、1316（正和5）年に息の浜に月堂宗規が妙楽寺を建立する。南北朝時代ごろから息の浜が急速に発展し、室町時代後半以降、幾多の戦災を受け1587年に九州平定を成し遂げた豊臣秀吉により博多の町は復興され、從来の街区を廃絶して新たに太閤町割が施行された。現在の町並みも基本的にはこの町割を踏襲している。江戸時代になると、鎖国政策によって貿易都市としての役割を終え、黒田氏の城下町福岡に対する商人の町博多として栄え、現在に至る。



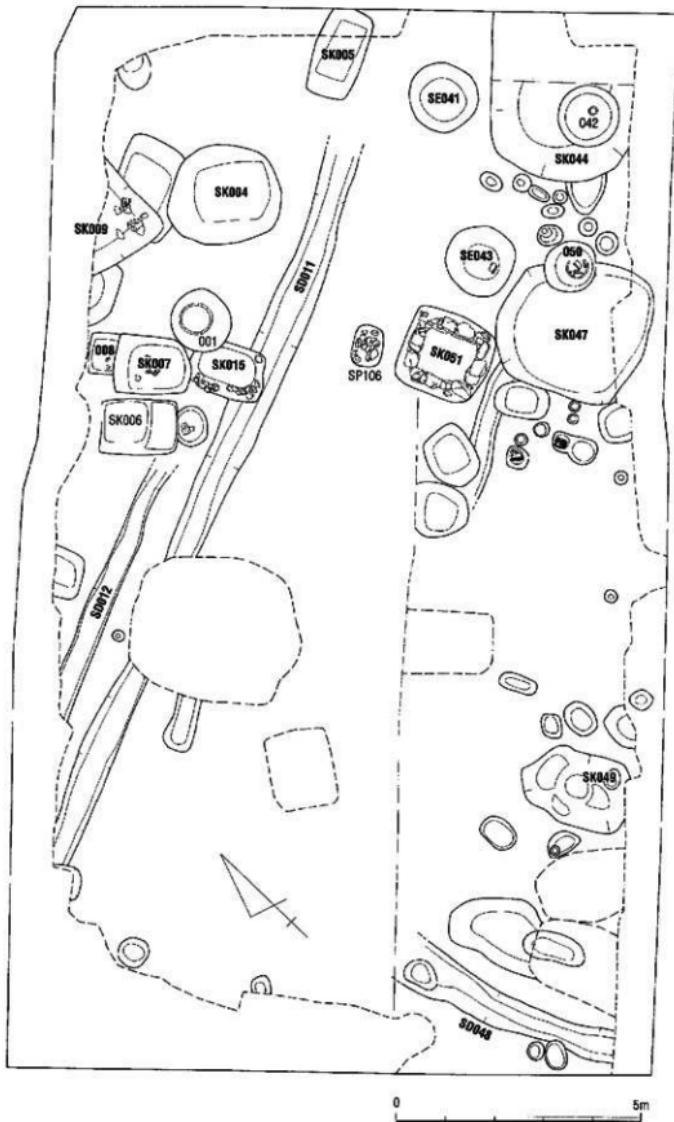
第1図 博多遺跡群の位置(1/25,000)



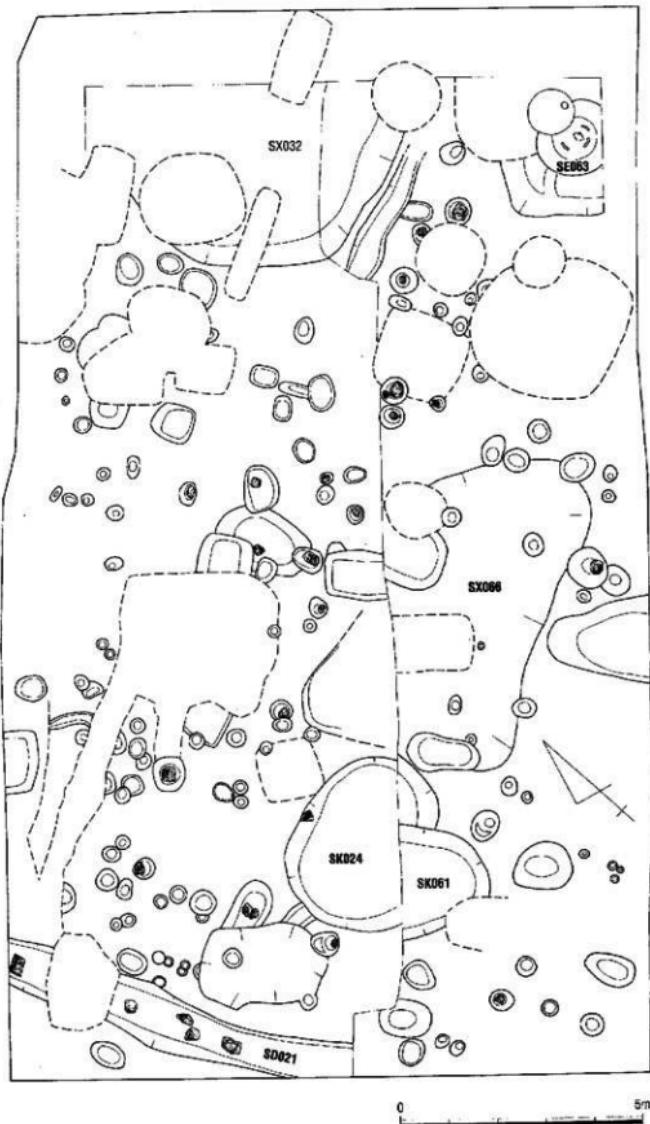
第2図 第141次調査区周辺地形図(1/5,000)



第3図 第141次調査区位置図(1/500)



第4図 第1面遺構配置図(1/100)



第5図 第2面遺構配置図(1/100)

第二章 調査の記録

1. 調査の概要

1) 調査経過

調査に先立ち、表土除去は委託者側にて行われた。遺構面まで2m程度表土を剥ぐ必要から、調査区の周囲にH鋼と鋼板で仕切りを設け、遺構面まで表土を除去、排土を場外へ搬出させていただいた。表土剥ぎ終了後、平成14年11月20日から調査に着手した。場内で排土を処理せねばならず、調査区の北半分を先に調査し、排土を反転後、残る南半分の調査を行うこととした。調査は後述する2面について行い、平成15年1月24日をもって終了した。

2) 概要

博多遺跡群第141次調査区は福岡市博多区古門戸町87番に所在し、現在の標高は約4.7mである。本調査区の南側隣接地では第93次調査が実施されている。調査は2つの面について実施した。重機による表土上き取りを受けて調査に着手した時点の面である標高2.5～2.6m付近の高さを第1面とする。この面でまず遺構検出を行い、続いて遺構の精査および記録を行った。その後、掘り下げた遺構の壁面を観察した結果、基盤の砂丘砂層までの間に明確な鍵層が見当たらないので、全体を30cm程度下げて、標高2.2～2.3mの基盤の淡黄色砂上を第2面とし、調査を行った。

今回設定した遺構検出面は人為的要素が強く、第1面では近世(18～19世紀)の、第2面では中世から近世にかけての遺構を検出した。次節では2面に分けずにまとめて個々の遺構・遺物の報告を行うことにし、本項で遺構面ごとの概要を簡単に述べておくことにする。また、本調査区における基本層序は鋼板で囲ったため観察できなかった。

第1面（第4図）

標高2.5～2.6mに設定した面である。全体に暗褐色系の砂質土が分布し、明瞭にプランが分かる遺構について掘下げを行った。主な検出遺構は上塙15基、井戸5基、溝4条、石組遺構1基である。近世(18～19世紀)の遺構である。調査区の周囲は墻面防護の鋼板を入れる際に浅く掘り込まれていた。近世から近代にかけての博多素焼人形が100点ほど出土した。

第2面（第5図）

基盤の淡黄色砂丘砂上をもって第2面とした。標高2.2～2.3mを測り、地形はほぼ平坦である。主な検出遺構は上塙13基、井戸1基、溝2条、柱穴多数である。柱穴は根石が残るものも多い。中世の遺構が主であるが、第1面で検出できなかった近世の遺構もある。遺物では12世紀後半頃からのものがある程度出土している。遺構では中世後半(15世紀頃)のものは確実にあるが、中世前半の輸入陶磁器を一定量伴う遺構は見当たらず中世前半のものがあるかはつきりしない。

今回の調査で出土した遺物の総量はコンテナ41箱分である。中世では土師器、中国や李朝からの輸入陶磁器が、近世では国内産陶磁器、土師器などに加え、博多人形が多く出土している。また、錢貨が84枚出土した。

2. 遺構と遺物

1) 土壙 (SK)

SK051 (第6図)

第1面で検出した石組遺構である。扁平な四角形に加工した石を正方形に組んでいる。石組は東と南で2段、西と北で1段が残存していた。石組の内側の空間は1m四方である。遺物は出土しなかった。
SK015 (第6図)

第1面で検出した略方形の土壙である。西側に拳大の礎を配しているようであるが、礎は底面から浮いた状態にある。また、礎は加工されていない。埋土は黒褐色粘質土で遺物は出土しなかった。

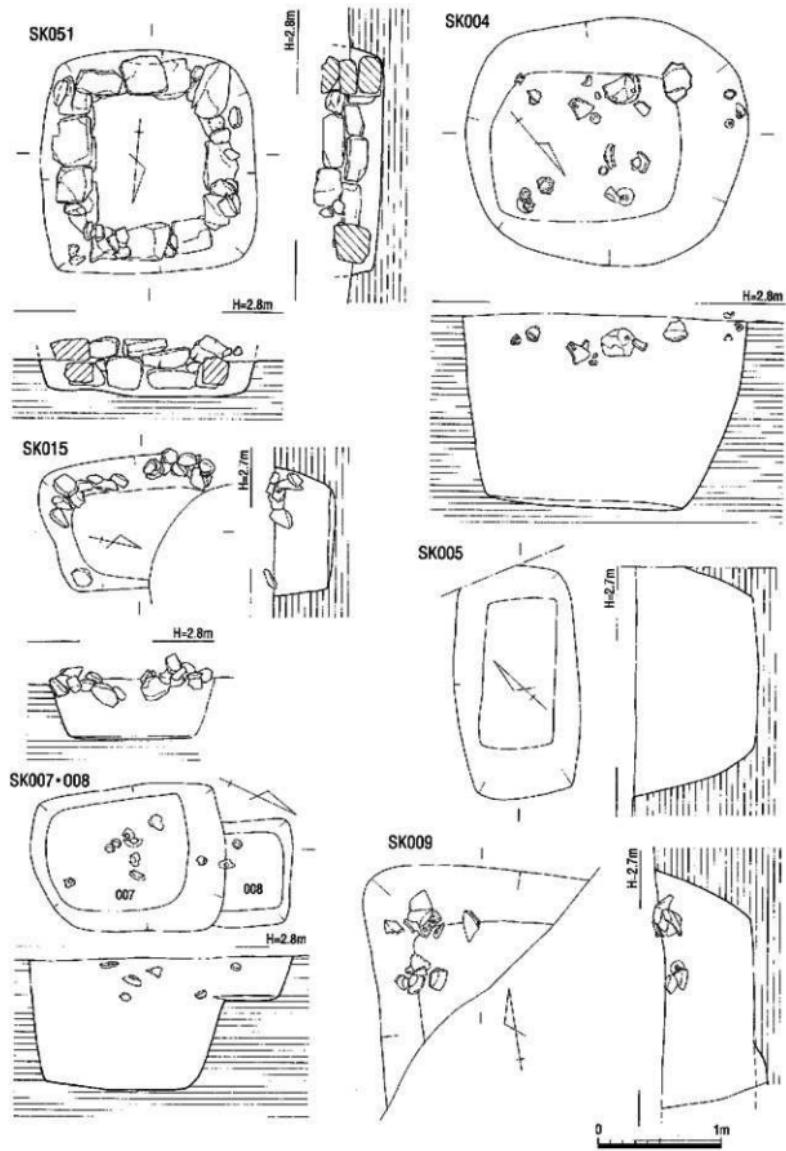
SK004 (第6図)

第1面で検出した隅丸方形の土壙である。長軸2.3m、短軸2.0m、深さ150cmを測る。埋土は灰色砂質土で炭化物を非常に多く含む。遺物も多く出土したが、時間の制約上、最上面の遺物のみ出土位置を記録している。出土遺物よりこの遺構の時期は18世紀後半頃に位置づけられる。

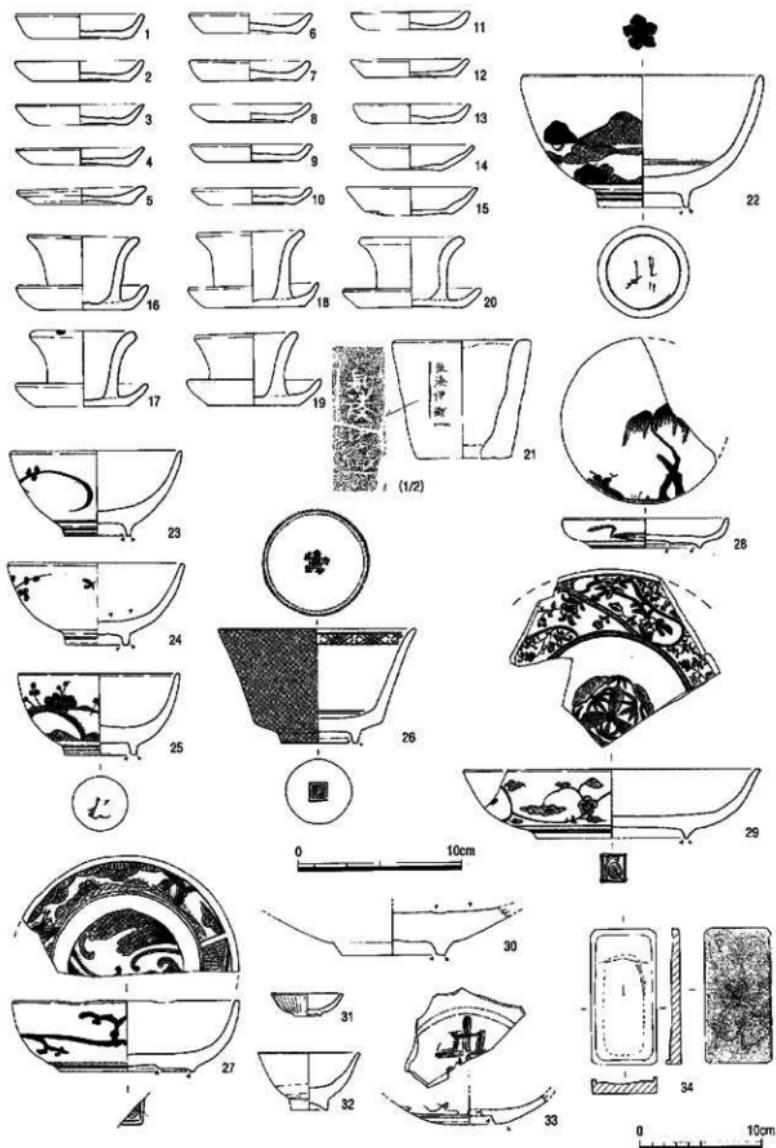
出土遺物 (第7・8図)

第7図1～15は上師器の小皿である。全て底部糸切り離しで、内底に静止指ナデが見られない。14、15は胎土が精良で器壁が薄く、ナデも丁寧である。大内系か。16～20は土師器の灯明皿である。小皿に上部がやや開く筒状のものを貼り付けている。16、17は口唇部に灯芯油痕が残る。21は土師器の焼塙壺である。芯の周りに粘土板を巻きつけて円筒をつくり、その一端に粘土塊を詰めて底とする板作り成形のもので、底の充填粘土がはずれている。外面に「泉湊伊織」の刻印があり、18世紀前半～中頃の藤左衛門系の製品である(『江戸考古学研究事典』)。22～30は肥前系の染付である。22は大ぶりの碗で口径14.8cm、器高8.1cmを測る。外面に山水文を描き、見込に五弁花のスタンプ、高台内にくずした「大明年製」銘がある。疊付のみ露胎で、呉須の発色が悪く灰～黒灰色を呈する。23～25はくらわんか碗である。24は見込の釉を輪状に拭き取り、底に砂粒が少し付着している。25は完形品で外面に雪の輪梅樹文を描く。高台内に銘あり。26は青磁染付碗である。外面に青磁釉、内面に透明釉を掛ける。見込に手描きの五弁花、高台内に「渦福」銘をもつ。口径12.0cm、器高7.0cmを測る。27、28の皿は蛇の目凹形高台である。27は口縁が輪花で高台内に「渦福」の銘を有する。29は大皿で復元口径24.4cm、器高5.7cmを測る。疊付のみ露胎で外底に「渦福」銘を有する。30の皿は肉厚で見込の釉を輪状に搔き取る。31は白磁の紅皿である。口径4.4cm、器高1.4cmを測る。32は白磁の小壺である。33は明代の染付である。基筒底の皿である。34は覗である。かなり使い込まれている。裏面に線刻の絵が描かれている。僧侶か。

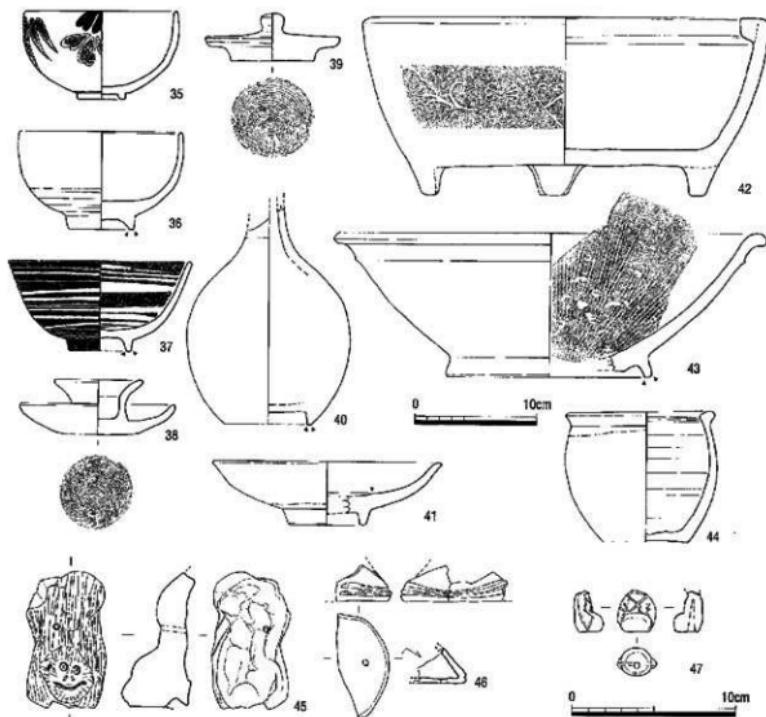
第8図35～37は陶器の碗である。35は淡黄白色の胎土を使い、釉色も黄褐色を呈する「京焼風陶器」である。1次焼成後に赤、緑、黄色の絵を付ける。36は疊付を除く全面に赤銅色の釉を掛ける。37はオリーブ褐色の地に白色の刷毛目文様を施し、高台内側に砂が付着する。38は陶器の灯明皿である。底部は糸切りで受け部がつく。皿の内面にだけ黒褐色の釉を掛けける。39は陶器の蓋である。40は陶器の瓶(徳利)である。外面に黄褐色の貫入の多い釉を掛ける。胎土は橙色である。41は肥前陶器の皿である。灰色の貫入が多い厚い釉が高台の上まで掛かり、見込は輪状に釉を搔き取る。口径14.0cm、器高3.9cmを測る。42は瓦質火鉢である。三足がつき、外面に菊花文を型押しする。口径33.2cm、器高14.6cmを測る。43は唐津焼の擂鉢である。口縁部は外反し、高台を貼付けている。44は陶器の壺である。全体に透明釉を掛けた後、口縁部にのみ黄褐色釉を上掛けする。口径12.2cm、器高10.8cmを測る。45～47は博多人形である。45は逆立ちした猿で、型を使わずに手づくね成形し、ヘラと竹管を使って毛並みや目、鼻、口、耳を表現している。腰の部分に貫通する穴を開けている。46は「般



第6図 SK051・015・004・005・007・008・009実測図(1/40)



第7図 SK004出土遺物実測図①(1/3、1/4) ※29・34は1/4、ほかは1/3



第8図 SK004出土遺物実測図②(1/3、1/4) ※40・42~44は1/4、ほかは1/3

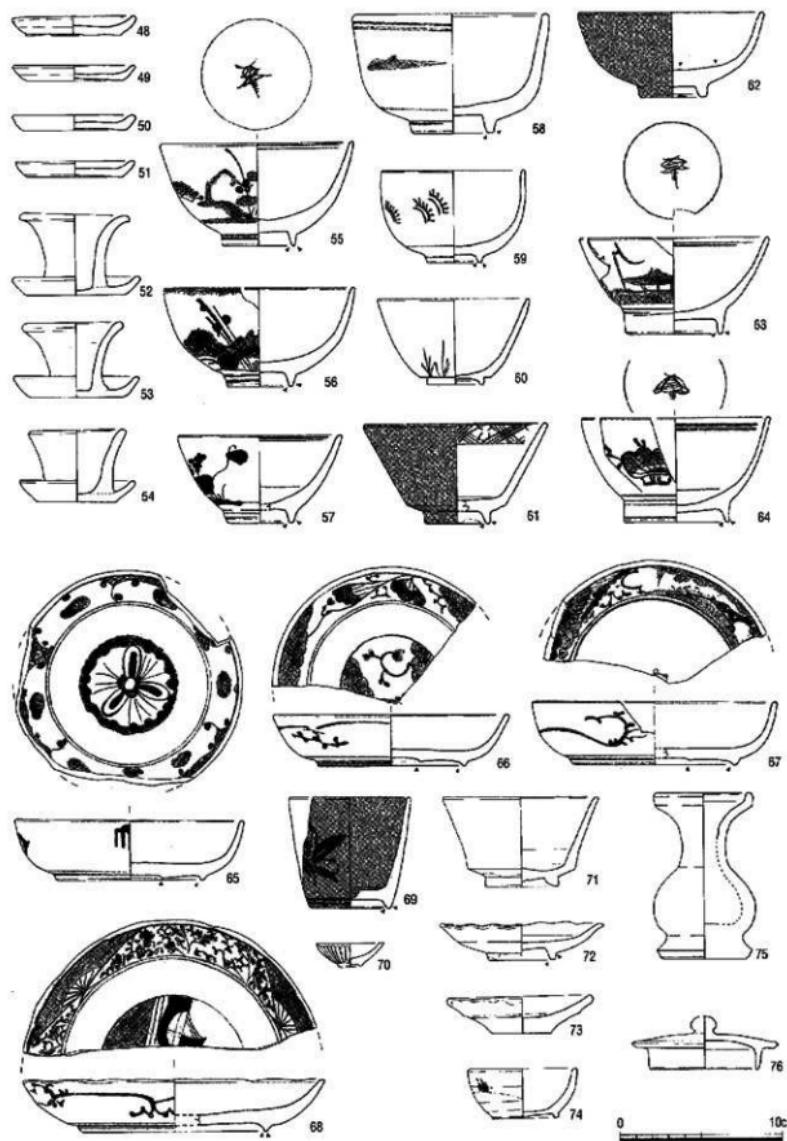
頭食い」という意匠の人形の足元、着物の裾の部分である。型作りで、底面に小さな穴が開く。47は小型の人形座像である。型作りで、下から串状工具で穿穴する。

SK005 (第6図)

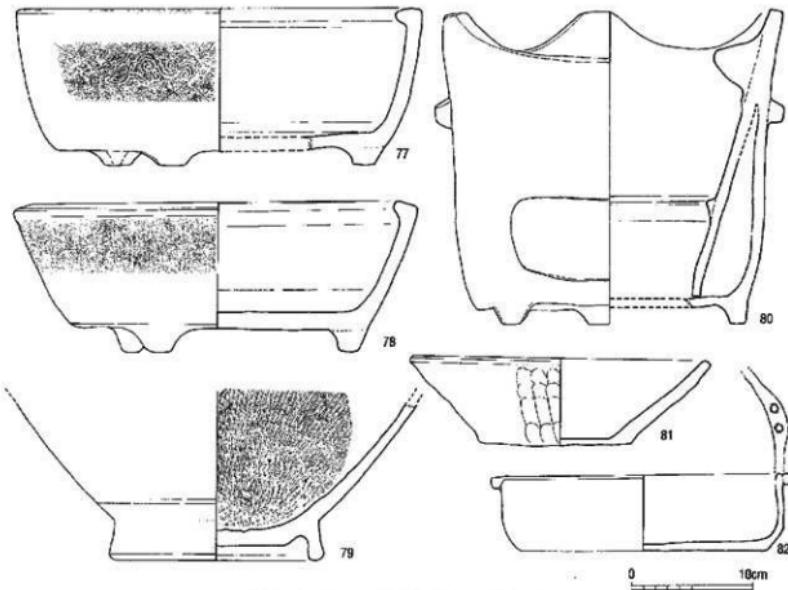
第1回調査区東端で検出した細長い土壌である。長軸1.9m、短軸1.0m、深さ100cmを測る。埋土は暗灰色上で、多くの遺物とともに漆喰が大量に投棄されていた。ごみ穴であろう。出土遺物より19世紀前半頃に位置づけられる。

出土遺物 (第9・10図)

第9図48~51は土師器小皿である。いずれも底部糸切りでほぼ完形である。口径7.7~7.2cm、器高1.2~0.9cmを測る。52~54は上師器の灯明皿である。55~64は肥前系の染付碗である。55は完形品で外面に松竹梅文を、見込に昆虫文を描く。56も外面に松竹梅文を描く。57は外面に草花と蝶を描き、高台が小さい。58は内厚で腰が張る。59は小ぶりで肉薄。60は胸胎染付。61、62は青磁染付で外面に青磁釉、内面に透明釉を掛け分ける。62は見込の釉を輪状に剥ぐ。63、64は広東碗である。見込に昆虫文を描く。65~68は肥前系染付皿である。65~67は蛇の目凹形高台。68は輪花である。69は青磁染付の猪口か。内外面とも青磁釉で外面に百合の花を描く。70は白磁紅皿である。71~76



第9図 SK005出土遺物実測図①(1/3)



第10図 SK005出土遺物実測図②(1/4)

は萬器である。71の碗は腰で屈曲し、高台は土見せ。胎土は黄白色釉がかかり、胎土・釉調は京焼風陶器に近い。72は小皿で口縁は輪花、見込は広範開で蛇の目釉剥ぎする。外面下半に一部梅花皮ができる。73の皿は赤橙色の胎土で、内面のみ褐色釉を掛ける。底部糸切りで見込に重ね焼きをした痕跡が認められる。74は盃か。オリーブ緑色釉を掛ける。75の瓶は黒褐色釉を掛け、底部は糸切りで露胎である。76は蓋で上面にのみ褐色釉を掛ける。

第10図77、78は瓦質火鉢である。三足がつき口縁部は内側に突起を貼り付けている。外面に77は龍、78は菊花文のスタンプを押す。79は唐津焼の擂鉢である。80は七厘である。博多窯。81は土師質の捏ね鉢である。外面には指なでの跡がつく。ほぼ完形で口径24.6cm、器高7.5cm、底径12.3cmを測る。82は土師質の焙烙である。完形品で口径22.9cm、器高6.4cm、底径20.0cmを測る。口縁部に2つの耳がつき、それぞれ2つの穿孔がある。

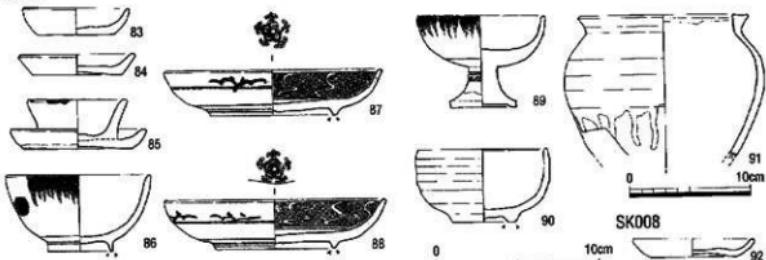
SK007 (第6図)

第1面で検出した方形土壙である。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ110cmを測る。埋土は暗灰色粘質土で焼土・炭化物を多く含む。時間の制約上、上面出土遺物のみ位置を記録している。

出土遺物 (第11図)

83、84は上師器小皿である。いずれも底部糸切りである。85は土師器の灯明皿である。口縁部に灯芯油痕が付着する。86～89は肥前系染付である。86は碗で外面に雨降り文と円文を描く。87、88の皿は同じデザインの製品で、見込に五弁花のスタンプを押し、内側面は濃みの中に波状文を白く抜く。底面中央にハリ支え痕が1つ残る。具須は濃緑色を呈する。89は仏飯器で外面に雨降文を描く。

SK007



第11図 SK007、008出土遺物実測図(1/3、1/4) 91は1/4、ほかは1/3

焼成悪く釉が白濁する。90は陶器の碗である。全体に黒褐色の鉛釉を掛けた上から黄土色・白色釉を縦方向に刷毛で塗る。唐津産。91は陶器の壺で、外面上半に褐色釉をかける。

SK008 (第6図)

第1面で検出した土壙でSK007に切られる。深さ40cmを測る。

出土遺物 (第11図)

92は土師器小皿である。底部糸切りで口径7.5cm、器高1.2cmを測る。

SK009 (第6図)

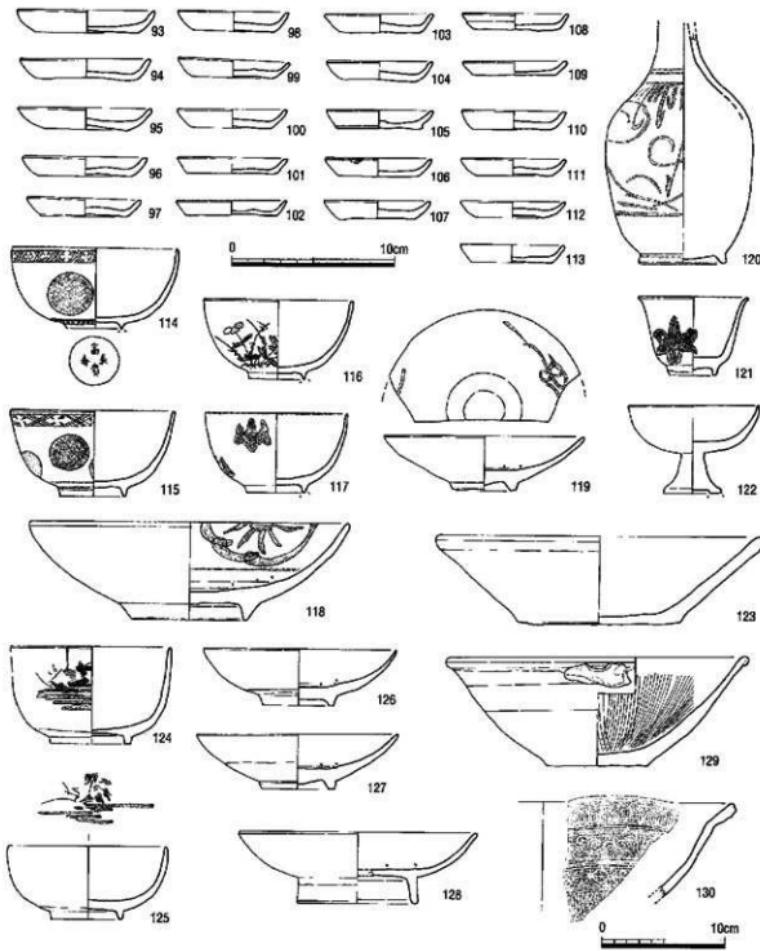
第1面で検出した土壙で半分は調査区外である。埋上は黒色粘質土。時間の制約上、上面遺物のみ位置を記録している。出土遺物より18世紀頃に位置づけられる。

出土遺物 (第12図)

93～113は土師器小皿である。全て底部糸切り離して、内底に静止指ナデが見られない。口径6.4～7.0cmに集中し、それより大きい一群が4点だけある。114～121は肥前系染付である。114～117は碗である。いずれも丸輪で肉薄。114、115は外面に四方櫛文と円文を描き、114の高台内に「富貴長春」銘がある。116は外面に草花文を描く。117は外面にこんにゃく印判の花文を押している。118は鉢で見込みを蛇の目釉剥ぎする。波佐見産であろう。119の皿も見込みの釉を輪状に剥ぐ。120は徳利である。波佐見産。121は小壺で、外面にこんにゃく印判の花文を押す。122は白磁の仏壇器である。123は土師質の捏ね鉢である。口径27.0cm、器高8.3cm、底径13.4cmを測る。124～130は陶器である。124、125は京焼風陶器碗である。淡黄白色の水漉した胎土を用い、釉調は黄色である。高台は角張り露胎、124は外面に、125は見込みに墨絵で山水文を描く。126、127の皿は見込みの釉を輪状に剥ぎ取る。内面に側線釉、外面に灰色釉を掛け分ける。128は大ぶりの皿で高台は高く垂直に立つ。釉調は黄オリーブ色で見込みの釉を輪状に剥ぐ。口径19.6cm、器高5.9cmを測る。129は焼締陶器の片口擂鉢である。注口部は体部の粘土を窓状にくり抜き、その外側に注口を指で貼り付けている。口径25.0cm、器高9.2cm、底径8.4cmを測る。130は鉢である。内面に幾何学文様を施し、白色化粧土で象嵌する。唐津産。

SK024 (第13図)

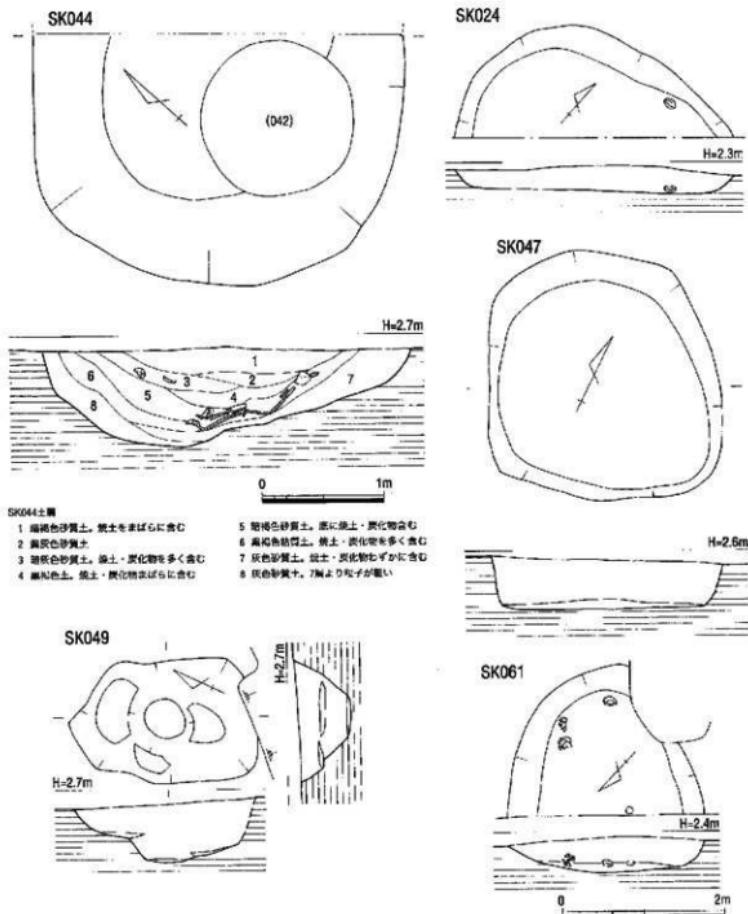
第2面で検出した。反転前に調査し、反転後の南半分とは遺構プランが齟齬をきたしている。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物より中世の遺構である。



第12図 SK009出土遺物実測図(1/3、1/4) ※120・123・128～130は1/4、ほかは1/3

出土遺物（第15図）

161～165は上師器の坏である。いずれも底部糸切りで161・162・164には板目压痕が残る。161は大型品で口径18.0cm、器高4.5cmを測る。162は口径に比して器高が高く、口径12.0cm、器高3.3cm。163～165は口径12.8～13.6cm、器高2.4～3.6cmを測る。



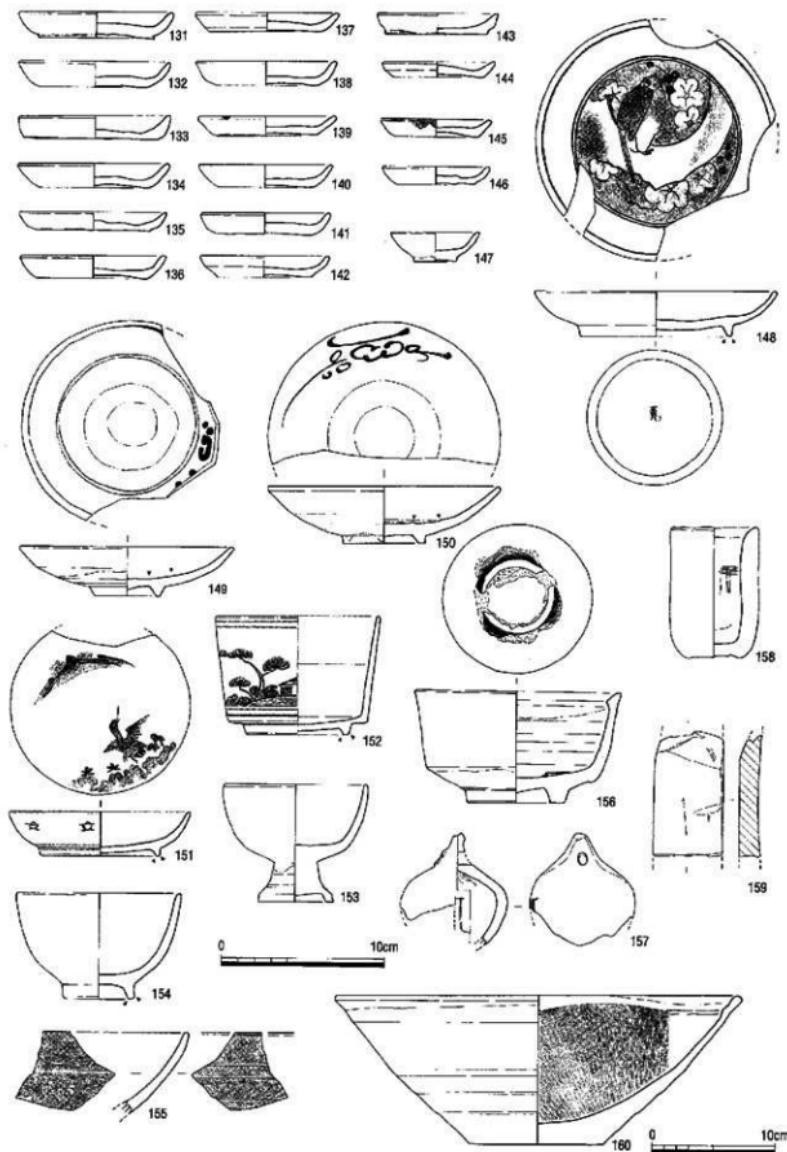
第13図 SK024・044・047・049・061実測図(1/40、1/60) ※SK044は1/40、ほかは1/60

SK044 (第13図)

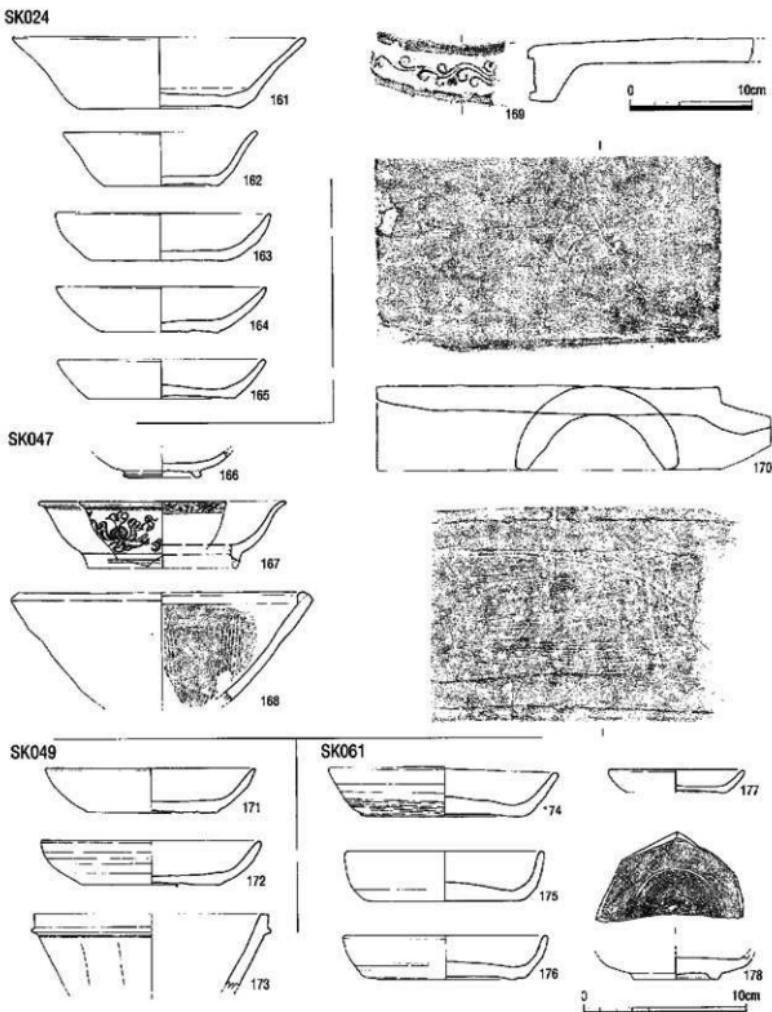
第1面調査区南東隅で検出した。調査区境界に位置するため、半分だけの掘り下げに留めた。土層断面部で長さ3.0m、深さ80cmを測る。埋土は主に暗褐色～黒褐色砂質上で8層に分層できる。各層に焼土、炭化物が含まれており、繰り返しこの土壤で焼成行為が行われたと考えられる。出土遺物の内容からごみ穴と考えてよいであろう。

出土遺物 (第14図)

131～146は上師器小皿である。全て底部糸切り離しで、内底に静止指ナデが見られない。口径の



第14図 SK044出土遺物実測図(1/3, 1/4) ※160は1/4、ほかは1/3



第15図 SK024・047・049・061出土遺物実測図(1/3、1/4) *168~170・173は1/4、ほかは1/3

分布は9.4～6.6cmの間で分散し、明瞭な分布上の山は見られないが、8cm以上、7cm台、6cm台の3サイズぐらいに区分できそうである。139・142・145は口縁部に丸芯油痕が付着する。147は白磁紅皿である。148～151は肥前系染付の皿である。148は見込に梅樹と鳥を描き、外底に「青」の銘がある。外底中央にハリ支え痕跡1つが残る。149、150は見込の釉を輪状に剥ぎ取る。152は肥前系染付の碗か。外面に山水文を描き、内面の上半は釉を拭き取っている。153は白磁の仏飯器である。154は京

焼風陶器碗である。155は象嵌磁器で皿か。内外面ともに文様を彫り込み白化粧土を象嵌している。156は陶器の香炉あるいは火入である。濃緑色の厚い釉で、高台部と内面は講胎である。砂目を使つた重ね焼きである。見込の上に置かれた製品の釉が垂れてしまい融着、無理にはずしたと見え、高台の一部が割れて付着している。157は土鉢である。158は粗製の焼塙壺である。刻印はない。159は砥石である。両面とも砥ぎ面として使っている。160は焼締陶器の擂鉢である。口径33.2cm、器高12.2cm、底径11.0cmを測る。

SK047（第13図）

第1面で検出した大型の土壙である。平面プランは不整形で直径2.8～3.0m、深さ60cmを測る。埋土は灰褐色砂質土で、出土遺物は少ない。中世の遺構である。

出土遺物（第15図）

166は瓦器椀の底部である。高台は断面四角形で外に張り出し、内面にミガキを施す。復元底径4.8cm、暗灰色を呈する。167は染付皿である。外面の筆書きした文様などから、明染付か。168は瓦質の擂鉢である。口唇部内側を突出させる防長産の製品である。169は軒平瓦である。170は丸瓦である。外面に繩目印、内面に布目痕が残る。

SK049（第13図）

第1面で検出した。平面プランは不整形で長軸2.4m、短軸1.6cmを測る。底面はでこぼこで最も深い部分で深さ70cmを測る。埋土は暗褐色砂質土。中世の遺構である。

出土遺物（第15図）

171、172は土師器の环である。いずれも完形品で底部糸切りで板目圧痕が残る。171は口径13.0cm、器高2.8cm、172は口径13.6cm、器高2.7cmを測る。173は滑石製石鍋である。口縁直下に断面台形の突帯を巡らす。内面は平滑に磨き、外面は面取りし、煤が付着する。

SK061（第13図）

第2面で検出した。反転後に調査し、反転前の北半分とは遺構プランが齟齬をきたしている。

出土遺物（第15図）

174～176は土師器の环である。底部糸切りで174は板目圧痕が残る。口径12.2～14.1cm、器高2.7～4.9cmを測る。177は土師器小皿である。底部糸切りで口径8.4cm、器高1.4cm。178は象嵌磁器である。全面に施釉し見込に白化粧土の象嵌を施す。李朝か。

2) 井戸 (SE)

SE041（第16図）

第1面で検出した井戸である。検出面での掘り方の直径は1.5mで直に掘り下げる。井筒の形態はとどめないものの、埋土内から大量の瓦が出土しており瓦組みの井戸である。傾斜が急なため完掘は出来なかつた。

出土遺物（第17図）

179は肥前染付の皿である。口縁は輪花で内面に山水文を描く。底部は肉厚で、底面は凹形蛇の目高台である。内面には4箇所にハリ痕跡が残る。180は鉄製品で包丁であろうか。全長22.5cm、幅3.0cmを測る。

SE043 (第16図)

第1面で検出した瓦組みの井戸である。検出面での掘り方直径は1.4mを測り、直に掘り下げる。埋土内から瓦が出土するが、井筒の形はとどめない。

SE050 (第16図)

第1面で検出した瓦組みの井戸である。検出面での掘り方直径は1.1mを測り、直に掘り下げる。検出面から90cmの深さで瓦が円形に組まれているのを確認した。

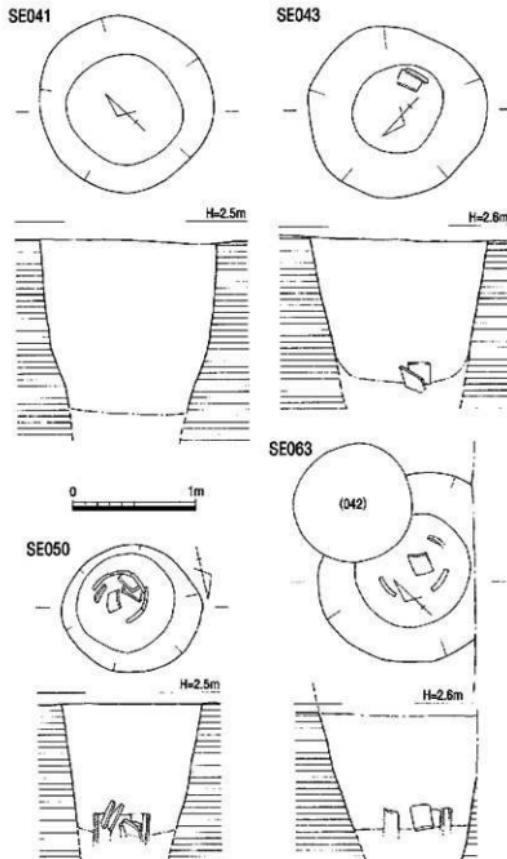
SE063 (第16図)

第2面で検出した瓦組みの井戸である。検出面での掘り方直径は約1.6mを測り、直に掘り下げる。70cmの深さで瓦が円形に組まれているのを確認した。

3) その他の出土遺物

第18図 181～188は土師器の壺および小皿である。SX066から出土しいずれも完形品である。SX066は調査区中央の広範囲に分布していた黒褐色砂質土の遺物包含層である。全て底部糸切りで板目

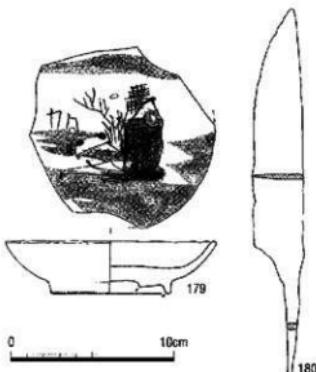
圧痕や内底の静止ナデが残るものもある。壺は口径12.8～14.0cm、器高2.4～2.8cm、小皿は口径8.0～8.9cm、器高1.4cmを測る。189～194は白磁である。189は碗で胎土、釉薬ともすぐれた優品である。底部に「申」と墨書きする。口径19.0cm、器高6.5cm、底径5.8cmを測る。190は碗の底部である。191の碗は体部が内湾気味に立ち上がり、内面に鏽をもたない連弁文をヘラ彫りする。192は小壺である。193は口禿げの皿である。194は人形である。顔のみ型にあて体は手捻りで成形する。中国の衣装を着て髪をはやした老人で、顔の部分に褐色釉を、それ以外に白色釉を掛ける。底部から背中にかけて孔が穿たれていることから灯芯押と考えられる。『九州陶磁の編年』ではII-2期(1630～1650年代)に当たられている。195は陶器の碗底部である。高台内に墨書きされている。「盛」か。196、197は龍泉窯系青磁碗である。内面にヘラで文様を描き、外表面は無文である。オリーブ緑色釉を掛ける。198、199



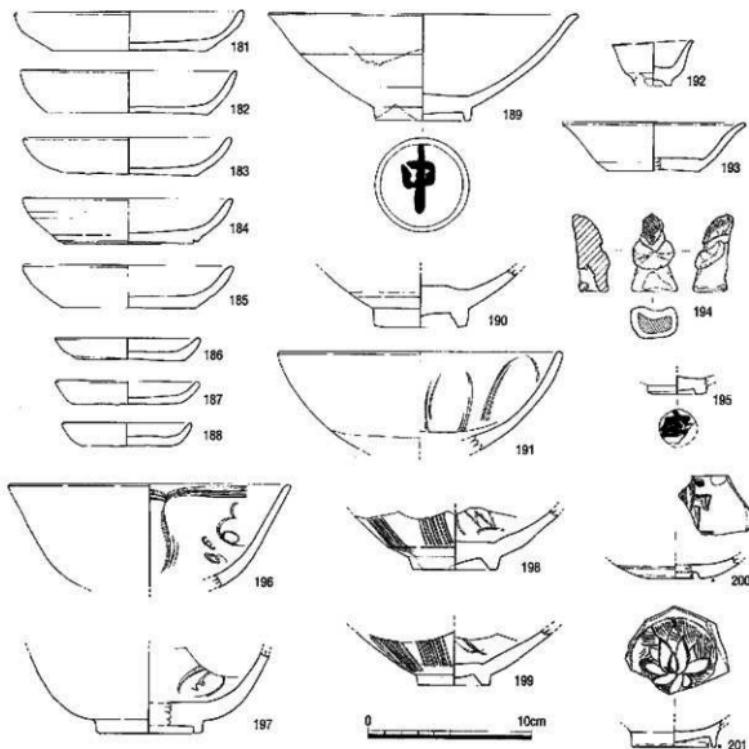
第16図 SE041・043・050・063実測図(1/40)

は同安窯系青磁碗である。外面に柳書き文を描き、外面下半は露胎である。200、201は明染付である。200は基筒底の皿。201は蓮子碗の底部である。

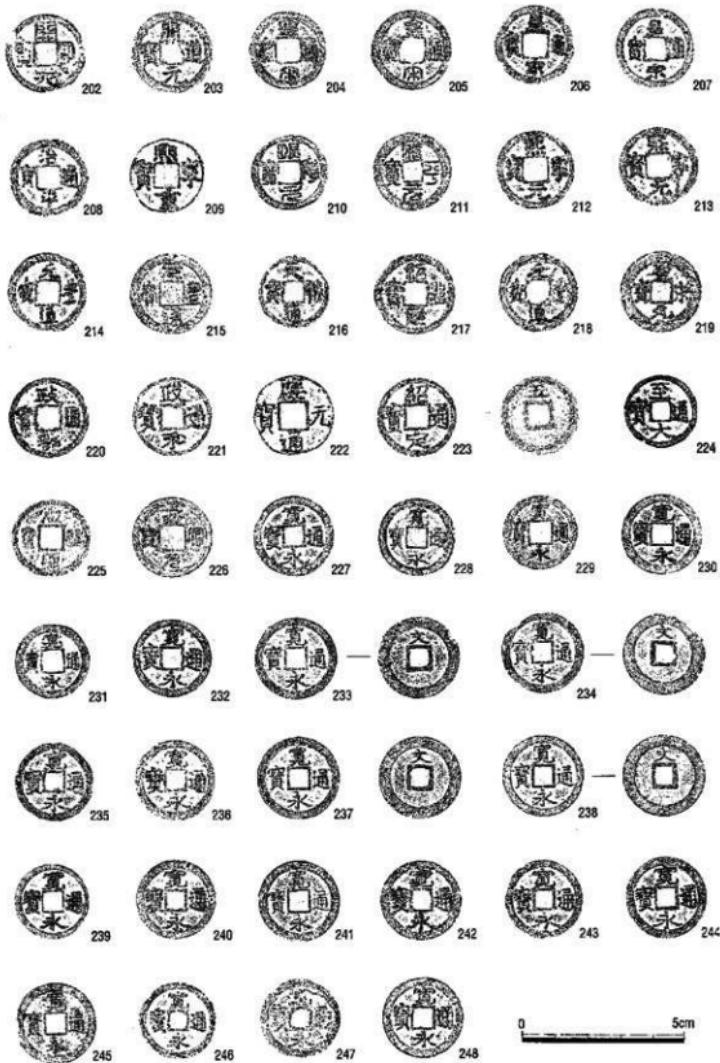
今回の調査では、全部で84枚の錢貨が出土した(第1表)。第19図に銭種が判別した47枚を示す。202～226は中世の渡来鐵である。227～248は近世の寛永通寶である。SX066では35枚(渡米銭12、不明23)が出土した。これは調査区中央部に広く分布していた黒褐色砂質土部分で、遺構というより包含層の様態を示していた。また、SK044では寛永通寶14枚が、SP104では寛永通寶12枚が出土した。



第17図 SE041出土遺物実測図(1/3)



第18図 その他の出土遺物実測図①(1/3)



第19図 その他の出土遺物実測図②(2/3)

第1表 出土錢貨一覧表

銭種	初鑄年	時代	出土遺構	枚数	発収番号	銭種	初鑄年	時代	出土遺構	枚数	発収番号
開元通寶	518	唐	S X 0 6 6	1	202				S X 0 0 2	1	227
明道通寶	1032	北宋	第1面検出	1	203				S X 0 0 3	1	229
皇宋通寶(篆書)	1039	北宋	S K 0 1 4	1	204				S K 0 0 4	1	230
皇宋通寶(真書)	1039	北宋	第1面検出	1	205	寛永通寶(古)	1636	江戸	S K 0 4 4	6	232-235-236-
治平通寶	1064	北宋	S X 0 6 6	1	206				S P 1 0 4	2	246-247
熙寧重寶	1066	北宋	第1面検出	1	207				第2面検出	1	248
新寧元寶(篆書)	1066	北宋	S X 0 6 6	1	209	寛永通寶(文鏡)	1668	江戸	S K 0 4 4	4	233-234-237-238
熙寧元寶(真書)	1066	北宋	S X 0 6 6	2	210-211				S X 0 0 2	1	228
元豐通寶	1078	北宋	S X 0 6 6	1	212	寛永通寶(新)	1697	江戸	S E 0 4 1	1	231
元祐通寶	1086	北宋	S X 0 6 6	1	213				S K 0 4 4	4	241-243-245
紹聖元寶	1094	北宋	S X 0 6 6	1	214				S K 0 4 4	1	
元符通寶	1098	北宋	第1面検出	1	215				S P 1 0 4	10	
徽宗元寶	1101	北宋	包含層	1	216				S K 0 1 4	1	
政和通寶	1111	北宋	S X 0 6 6	1	217				S K 0 2 4	1	
慶元通寶	1195	北宋	第1面検出	1	218				S X 0 6 6	23	
紹定通寶	1228	南宋	S X 0 6 6	1	219	判読不能			S P 1 0 4	1	
至大通寶	1308	元	S E 0 0 1	1	220				第1面検出	2	226
					221				表土	1	225

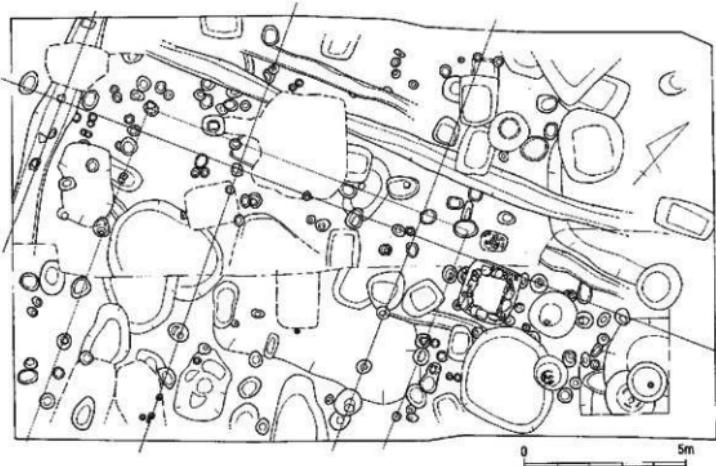
第三章 まとめ

今回の調査では、中世後半から近世(15世紀頃~19世紀)にかけての遺構を検出した。主な検出遺構は上塀28基、井戸6基、溝6条、石組遺構1基、柱穴多数である。ほとんどの遺構が近世のものである。遺物だけで言えば中世前半の輸入陶磁器が一定量出土する。また、近世から近代にかけての博多人形の破片が100点程度出土している。

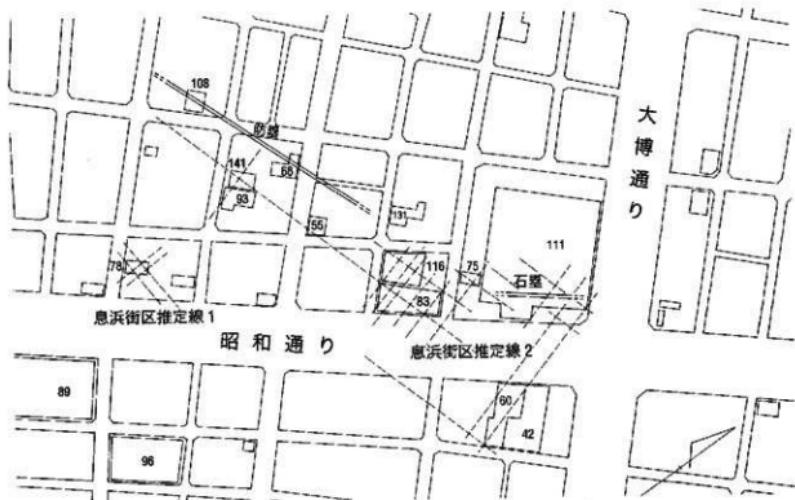
最後に、本調査区における地割について検討したい。第1面、第2面の遺構配置図を合成して、溝・柱穴の分布を表したのが第20図である。本調査区で検出された溝および柱穴列はことごとくひとつずつ直交軸に軸をとっていることが明白である。すなわち、この軸に示される本地点の旧来の地割(街区)の方位は、南北方向が磁北から21°西偏し(N-21°W)、東西方向が磁北から69°東偏する(N-69°E)。図示した柱穴群以外にも同じ軸で並ぶ柱穴群があり、建物も復元できそうであるが、ここでは地割の軸を確認できたことで十分である。この地割は現在の町並みとは軸を異にする。時期については、15世紀~近世の間ではあるが、遺物の少なさや、溝出土遺物に複数時期のものが混在することから、細かく限定できない。博多では太閤町割という街区形成上的一大画期があるが、今回の調査では残念ながらこの問題に新たな知見を与えることができない。

さて、「息浜」のほかの調査事例と照合してみよう(第21図)。中世後半期の息浜における地割方位に関しては本田浩二郎氏によって整理・検討されている(「中世後半期における博多の景観」、2001、「博多77」)。既往調査における関連遺構の事例は本田氏の論考に挙げられているので、そちらを参照して頂きたい。結論をいえば、今回検出した地割方位は周辺の調査区でも確認されている。すなわち、本調査区の北側の第68次・108次調査区でN-67°Eに軸をとる防墻状遺構が、本調査区から東

側150～200mに位置する第75次・83次・116次調査区でN-19°～26°-Wに軸をとる街区（街区推定線2）が認められる。時期的には15世紀後半から16世紀前半とされている。今回の調査の結果、防壁遺構に方向を規定されたと考えられる地割（本田氏の街区推定線2）が直線距離500mにわたって続く可能性が高くなり、息浜の広域にわたる街区の存在が予見される。一方、本田氏の街区推定線1は本調査区では認められず、第78次調査区周辺の小範囲に留まるのではないか。



第20図 地割復元図(1/150)



第21図 息浜中世後半期の地割復元図(1/4,000)

付論 博多遺跡群第141次調査出土動物遺存体について

屋山 洋（福岡市教育委員会）

本調査区で出土した動物遺存体のうち同定できたものは魚類と哺乳類である。

哺乳類 イルカ類が出土している。他の調査地点においても解体痕がある椎体のみが多く出土するが、本調査区では椎骨のみではなく、歯や上胸骨なども出土している。特にSK044では細片ではあるが頭蓋骨、下頬、肩胛骨、肋骨が出土しており、イルカ類のほぼ全身が遺跡内に持ち込まれ、また大小2種の環椎と下頬が出土していることから複数種のイルカ類が利用されたことが判る。

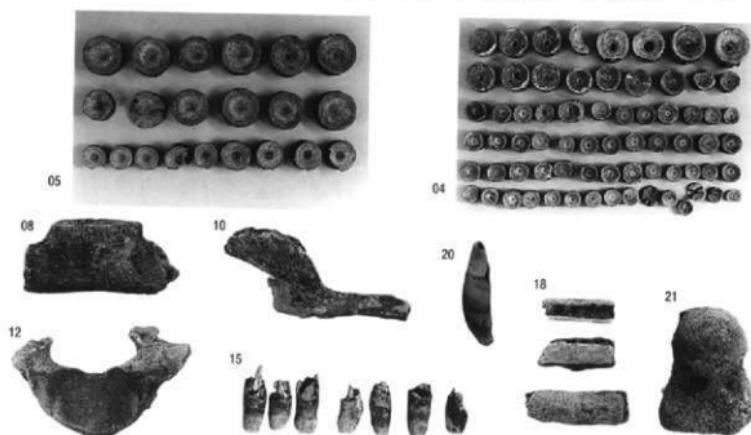
魚類 サメ類とフグ類が出土しているがフグ類はわずか歯1点のみの出土である。

サメ類 SK009からまとまって出土した椎骨はネズミサメ科21個、その他69個とまとまっている。椎骨は体の後半部分と思われる。また、椎骨にはナタ状の刃物痕や割り箸ほどの太さの棒が刺さった痕跡が見られる。

大型魚類 マグロかカジキのものと思われる椎骨の一部が出土している。

小型のイルカ類は沿岸性である可能性があるが大型魚類や大型サメ類は外洋性であるため、外洋において積極的な漁業を行っていたものと思われる。海洋性哺乳類以外の骨が出土しないのは18世紀に他の動物の肉食忌避が進んでいたためか、もしくは本調査地点がイルカの解体場であった可能性などが考えられる。

地区	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	初期	中期	後期	時代
01	魚類	サメ科	椎骨		椎体のみ	3個	後3.6cm	なし	なし	是き合計7.2cm	BC
02	魚類	サメ科	椎骨		椎骨	複数小片	不明	なし	なし		BC
03	魚類	イルカ類	椎骨		椎骨	一部椎体あり	不明	あり	なし		BC
04	魚類	サメ科	椎骨		椎体のみ	69個	あり	なし	なし	是き合計3.4cm	BC
05	魚類	ネズミサメ科	椎骨		椎体のみ	21個	なし	なし	なし	是き合計2.4~4.1cm	BC
06	魚類	フグ類	歯骨		歯冠のみ		なし	なし	なし		BC
07	魚類	サメ科	椎骨		椎骨	特突起のみ	なし	なし	なし		BC
08	魚類	サメ科	椎骨		椎骨		あり	なし	なし		BC
09	魚類	サメ・エイ類	椎骨		椎体	5個	後1.5cm	なし	なし	是き合計4.3cm	BC
10	魚類	マグロ・カジキ	椎骨		椎骨	神經穿通?		白色化	白色化	遺存不良	BC
11	魚類	サメ科	椎骨		椎骨	椎部のみ				遺存不良	BC
12	魚類	サメ科	椎骨		椎骨	椎弓板	若歌	なし	なし	各椎体分離	BC
13	魚類	イルカ類	椎骨		椎骨	頭骨側面	化骨化済み	あり	なし		BC
14	魚類	イルカ類	椎骨		椎骨	小片	不明	なし	なし		BC
15	魚類	イルカ類	椎骨		椎骨	7本	不明	なし	なし	是き合計7.5cm	BC
16	魚類	イルカ類	椎骨		椎骨		なし	なし	なし	遺存不良	BC
17	魚類	イルカ類	椎骨		近位椎小片3個					大小2個体分離	BC
18	魚類	イルカ類	下頬骨	左	下頬骨	7点	前なし	不明	なし	なし	BC
19	魚類	イルカ類	椎骨		椎骨	のみ	7個	3個未化骨化	あり	1個未化骨化	BC
20	魚類	イルカ類	椎骨	右	椎骨	2本	1本は椎本欠損	不明	なし	L. 2.72cm	先端挖削している
21	魚類	イルカ類	上胸骨	右	上胸骨	1本	通透部化骨化済み	新しい	なし		BC
22	魚類	イルカ類	上胸骨	右	上胸骨	大塊	通透部化骨化済み	新しい	なし		BC
23	魚類	サメ・エイ類	歯骨		歯骨(歯骨?)						BC
24	魚類	サメ・エイ類	歯骨		歯骨	神経小片のみ					BC
25	魚類	サメ・エイ類	歯骨		歯骨	椎体のみ	前歯欠損	不明	なし	前歯1.4cm	BC





1. 第1面南半(東から)



2. 第1面北半(東から)



3. 第2面南半(東から)



4. 第2面北半(東から)

図版 2



1. 調査区風景(北から)



4. SK004(北東から)



2. SK051(北から)



5. SK005(南から)



3. SK051(北西から)



6. SK007・008(東から)



1. SK009(西から)



4. SD011(東から)



2. SK044土層(南西から)



5. SD021(北から)



3. SK047(北から)



6. SP106(南東から)

図版 4

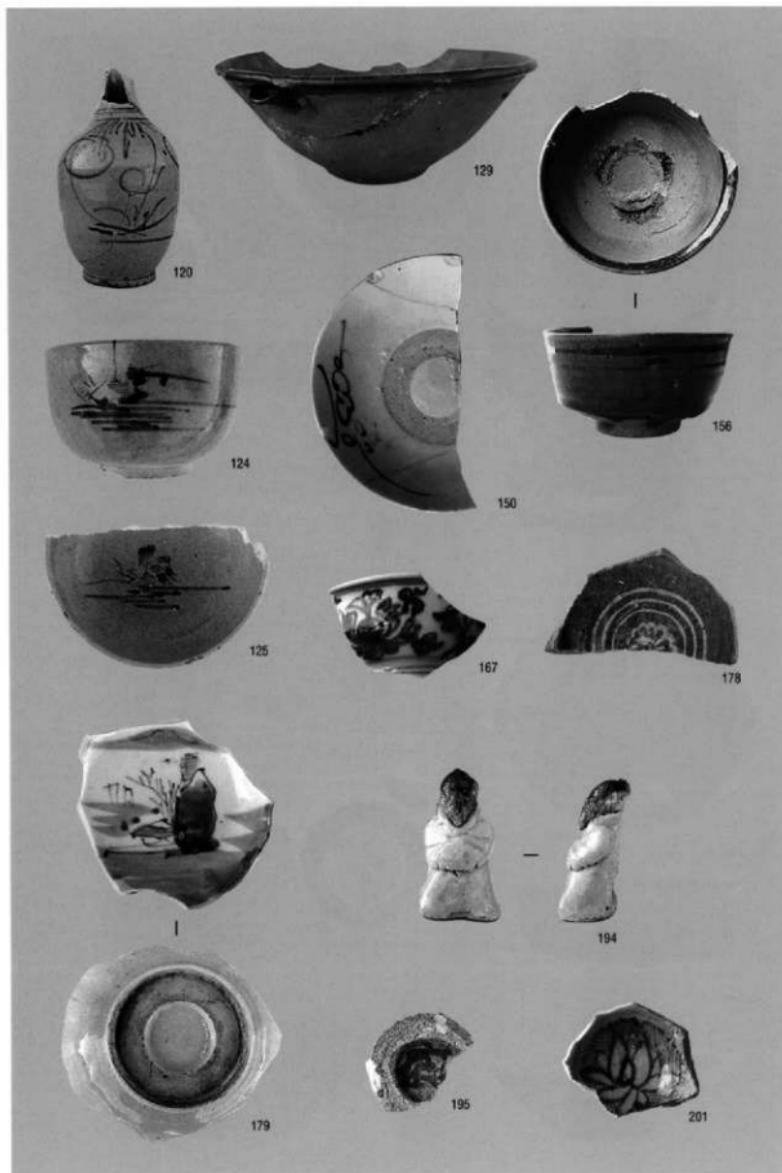


出土遺物①



出土遺物②

図版 6



出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	はかた ひやく							
書名	博多 100							
圖書名	博多遺跡群141次調査報告							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第809集							
編著者名	上角智希、屋山洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL.092-711-4667							
発行年月日	2004年 3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐん 博多遺跡群 第141次	ふくおか県福岡市 はかた区古門戸 まち87番	40132		33° 35' 37"	130° 24' 23"	2002.11.20 ~ 2003.01.24	286m ²	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群 第141次	集落	室町 戦国 江戸	土塙 井戸 溝 石組遺構	28基 6基 6条 1基	国産陶磁器 土師器 錢貨 博多人形			

博多 100

—博多遺跡群第141次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第809集

2004年(平成16年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 横九州カスタム印刷
福岡市博多区東比恵3丁目15-15

